

## 子ども部屋に関する研究 (その2)

—— 子ども部屋が子どもに与える影響 ——

中 島 喜代子

### Studies on the Children's Room (Part 2) The Influence that the Children's Room Have an Effect on Children

Kiyoko NAKAJIMA

#### 1. はじめに

先進諸外国の中では、「うさぎ小屋」といわれるほど、すまいの状態は良くないものであるが、一方子ども部屋の所有率は、非常に高い傾向を示している。こうした状況の中で、子ども部屋が家族のコミュニケーションを阻害する側面や子どもの生活の把握が困難になることによる子どもの非行化、あるいは子ども部屋を与えても子どもが有効に使用せず空室化していること、さらに子ども部屋を優先して使用させることによる夫婦寝室や居間へのしわ寄せ等をあげ、子ども部屋不要論や子ども部屋の見直しがいわれている。

前報<sup>1)</sup>では、子ども部屋の所有状況や位置などの空間的条件に影響を与える要因について検討した。本報では、逆に子ども部屋のあり方が子どもの生活や家族の生活等に及ぼす影響について考察する。

調査は、前報と同様に三重県鈴鹿市内に位置する公立学校の中から小学5～6年生、中学2年生、高校2年生の児童生徒とその母親を対象として、昭和61年7月に行なったものである。

#### 2. 子ども部屋の実態

子ども部屋の所有率は、前報で示したように、小学生で75%、中学生で87%、高校生で92%となっている。すなわち、年齢とともに所有率は上昇しており、中・高校生ではほとんどの子どもが何らかの形の子ども部屋をもっているといえる。また、

性別による所有率の差はほとんどみられず、性別に関わらず子ども部屋を与えることが一般化している状況をとらえた。

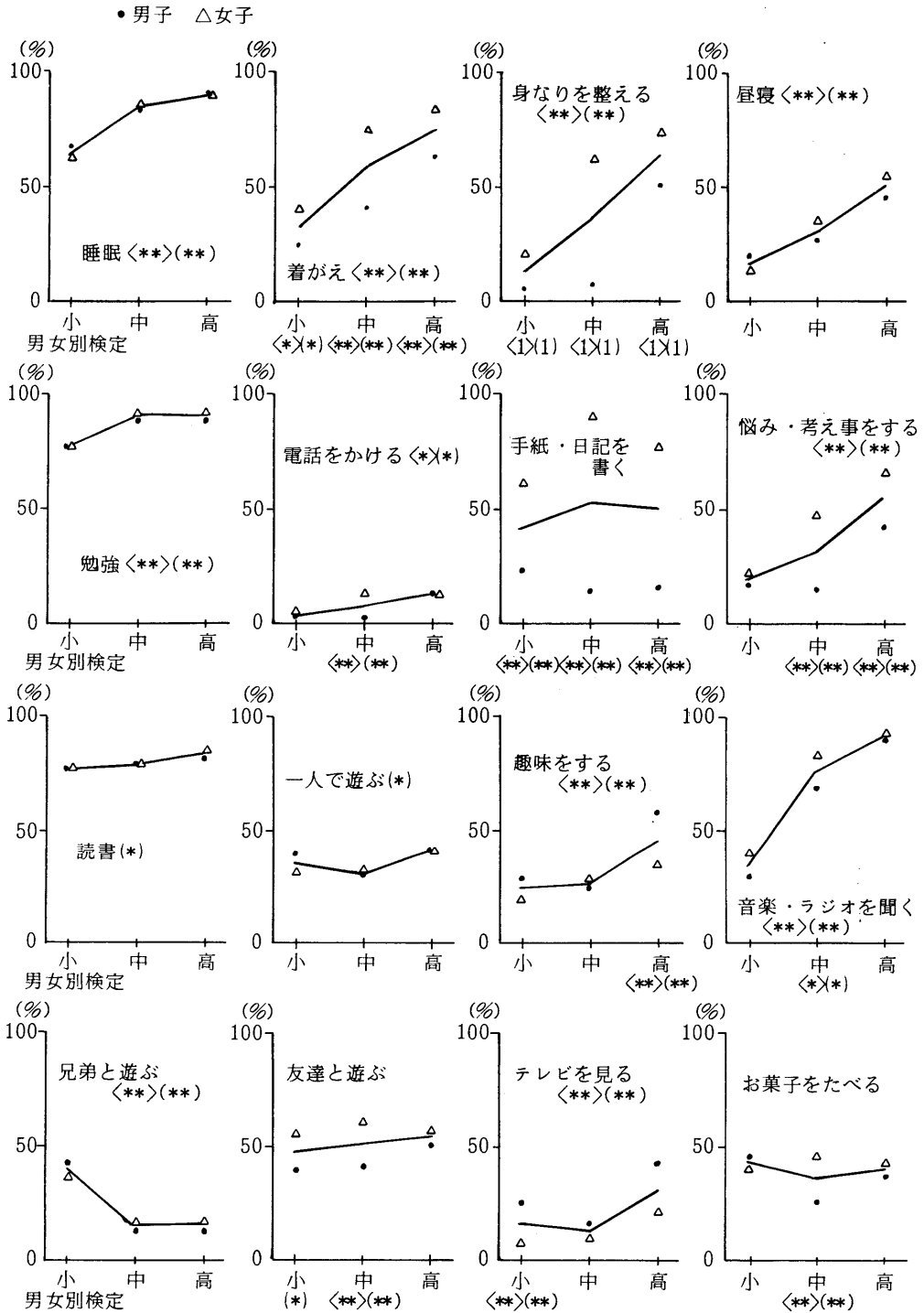
次に、子ども部屋で行なう行為の側面から子ども部屋の使用状況をみる。これらの行為は、その性格によって表1に示すように分類できる。図1

表1 行為の性格分類

性格分類	行 為
身体的プライバシー行為	睡眠、着替え、身なりを整える、昼寝をする
精神的プライバシー行為	勉強、電話、手紙・日記を書く、悩み・考え事をする
趣味的行為	読書、ひとりで遊ぶ、趣味をする、音楽・ラジオを聞く
複数人数遊び	兄弟と遊ぶ、友達と遊ぶ
家族共同的行為	テレビを見る、朝食をとる、夕食をとる、お菓子を食べる

に示すように身体的プライバシー行為や精神的プライバシー行為、趣味的行為、家族共同的行為は各行為とも年齢が上昇するに従い行為率が上昇し、子ども部屋は多目的化するといえる(なお、家族共同的行為のうち、「朝食をとる」「夕食をとる」の行為は小・中学生では皆無であり、高校生でも1%に満たない)。また、身体的プライバシー行為および精神的プライバシー行為の一部については、女子の行為率が高い特徴がみられる。

さらに、個々の子ども部屋の性格をとらえるため、行為からみた子ども部屋の性格パターンを作成した。作成したパターンは、Ⅰ勉強+就寝、Ⅱ勉強+就寝+着替え、Ⅲ勉強+就寝+着替え、Ⅳ勉強+就寝+着



( <math>\chi^2</math> ) は  $\chi^2$  検定、( ) は順位相関係数の検定を示す。( 行為名の横の検定は学年別 )  
 \*\* は 1% 水準、\* は 5% 水準で有意を示す。( 図下の検定は男女別 )

図1 子ども部屋で行なう行為の行為率

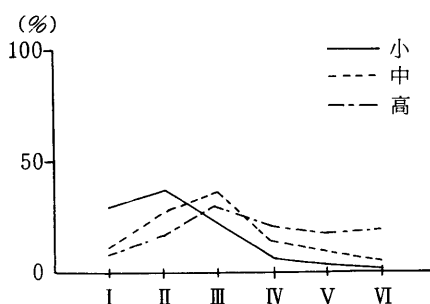


図2 年齢段階別子ども部屋の性格パターン

替え+考え事、V勉強+就寝+着替え+考え事+趣味、VI勉強+就寝+着替え+考え事+テレビを見るの6段階であり、段階が上がると行為内容が多目的化するものである。これも、図2に示すように年齢が上昇するに従い、多目的化する子ども部屋の性格パターンの比率が増加している。

### 3. 子ども部屋が子どもの自立に与える影響

表1に示した行為の各分類について、それぞれの行為数および子ども部屋の所有形態、子ども部屋の性格パターンと子どもの自立度との関連を検討する。子どもの自立については、生活面自立と精神面自立に分けて図3に示すような各項目について調査した。図3は年齢段階別の生活面および精神面の自立達成率を示したものである（自立達成率は、図3に示す項目番号1～9、11～13、17

は「aはいつも親がする」「bほとんど親だがたまに自分でする」「cほとんど自分だがたまに親がする」「dいつも自分でする」のうちcとdを加えた率。10、14～16、18は「aよくできる」「bだいたいできる」「cあまりできない」「dできない」のうちaとbを加えた率。19～30は「aそうである」「bだいたいそうである」「cどちらともいえない」「dあまりそうでない」「eそうでない」のうちaとbを加えた率をそれぞれ示す。)

生活面自立は学年による差が大きく、平均自立個数は小学生で8.0個、中学生で10.6個、高校生で12.5個となっており子どもの成長と共に自立が確実に進んでいる。生活面自立について、各項目別にみても、「食器の後片付け」を除いてすべて学年上昇と共に自分で行なう比率あるいは自分ができるものの比率が増加している。(図3参照)。

一方、精神面自立は学年による差が小さく平均自立個数は小学生5.0個、中学生5.7個、高校生5.8個となっている。精神面自立について、各項目別にみると内容によって学年間の差異があり、親離れやアイデンティティ確立志向の側面では学年上昇と共にその比率が高くなるが、計画性や脱自己中心性の一部は学年上昇と共にその比率が低下している(図3参照)。これは、親の生活管理下から離れて自分の生活基準を定めるまでのプロセスと考えられる。

次に、子どもの自立と子ども部屋の所有形態や使用内容との関連について検討する。図3に示した生活面自立18項目と精神面自立12項目について、子どもの自立数と子ども部屋の実態との関連を表2に示す。また、子ども部屋所有形態別平均生活

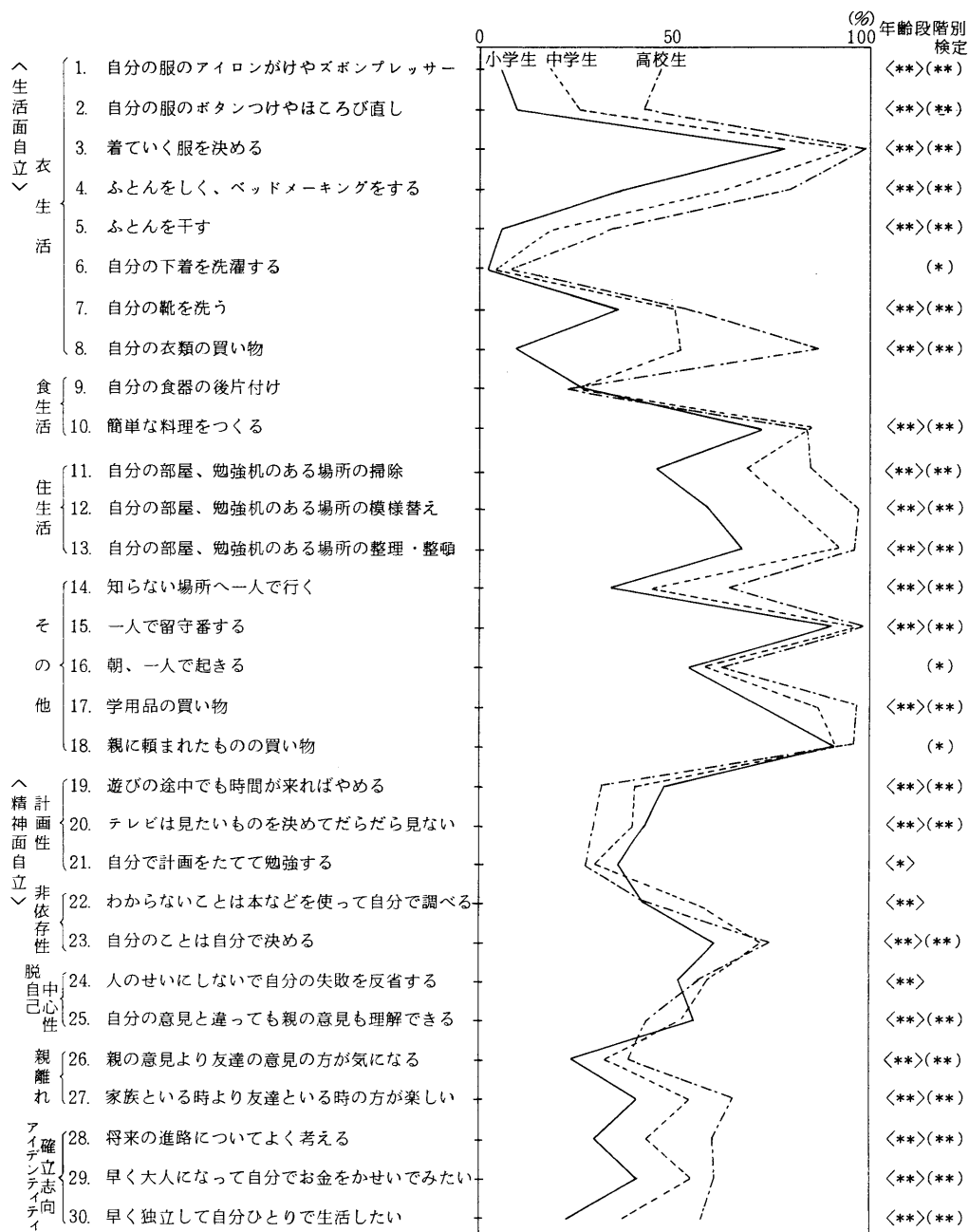
表2 自立数と子ども部屋の実態との関連

(子ども部屋所有形態と子ども部屋の性格パターンは順位相関係数それ以外はピアソン相関係数)

	生活面自立数			精神面自立数		
	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生
子ども部屋所有形態	0.0599	0.1027*	0.0463	-0.0072	0.0829*	0.0414
身体的プライバシー行為数	0.2496**	0.3046**	0.1349**	0.1378	0.0981	0.1100*
精神的プライバシー行為数	0.1901*	0.2328**	0.2695**	0.1588*	0.0974	0.2172**
趣味的行為数	0.1355	0.1486*	0.0241	0.1190	-0.0003	0.2113**
複数人数遊び行為数	0.1305	0.1180*	0.1054*	0.0312	0.0404	0.0435
家族共同的行為数	0.1137	0.1507*	-0.0658	0.0927	-0.0083	0.1018*
子ども部屋の性格パターン	0.2451**	0.1921**	0.1277**	0.1696*	0.0937*	0.0868*

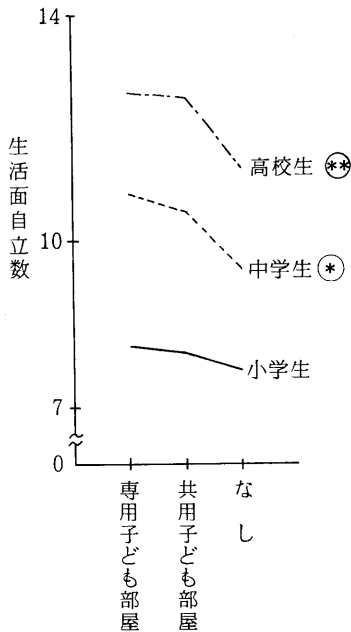
\*\*は1%水準で有意性があることを示す

\*は5%水準で有意性があることを示す



( < > は  $\chi^2$  検定 ( ) は順位相関係数の検定を示す)  
 \*\* は 1%水準、\* は 5%水準で有意を示す

図3 子どもの生活面および精神面自立達成率



(○は平均値の検定  
\*\*は1%水準で有意を示す  
\*は5% " )

図4 子ども部屋の所有形態別平均生活面自立数

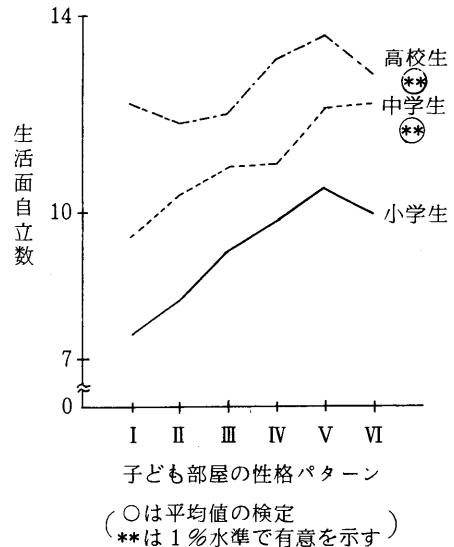


図5 子ども部屋の性格パターン別平均生活面自立数

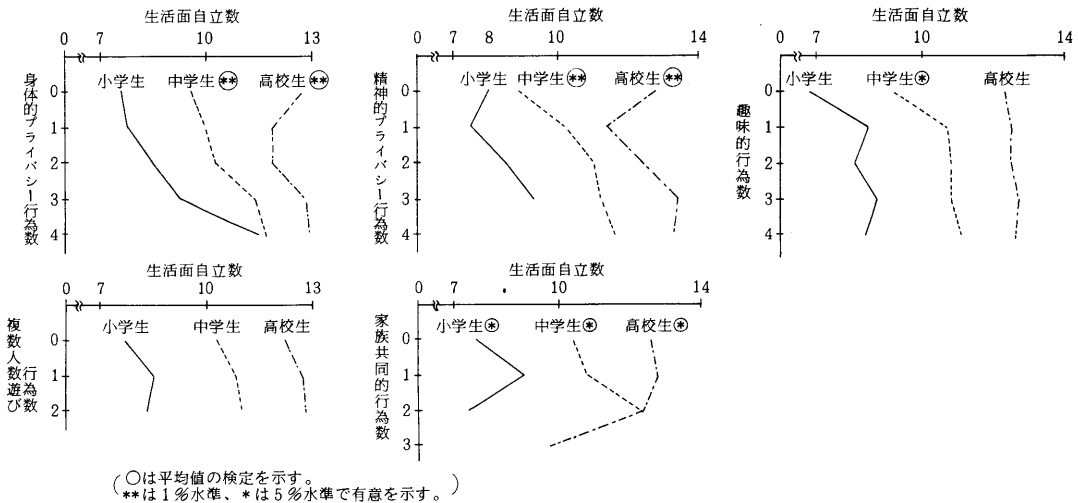


図6 子ども部屋で行なう行為数別平均生活面自立数（年齢段階別）

面自立数を図4に、子ども部屋の性格パターン別平均生活面自立数を図5に、子ども部屋で行う行為数別平均生活面自立数を図6に示す。生活面自立は、子ども部屋で行なう身体的プライバシー行為数や精神的プライバシー行為数が増加すると自立度が進む傾向がみられる。中学生段階では趣味

的行為数や複数人数遊び、家族共同の行為についても子ども部屋で行なう行為数が増加すると自立度が進み、また子ども部屋を所有している方が自立度が進んでおり、特に中学生段階では子ども部屋が生活面の自立度に与える影響は大きいといえる。

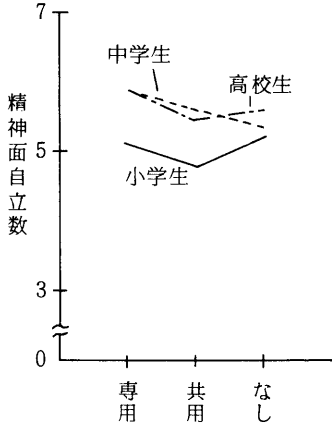


図7 子ども部屋の所有形態別平均精神面自立数

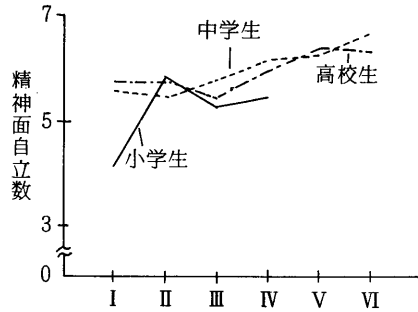


図8 子ども部屋の性格パターン別平均精神面自立数

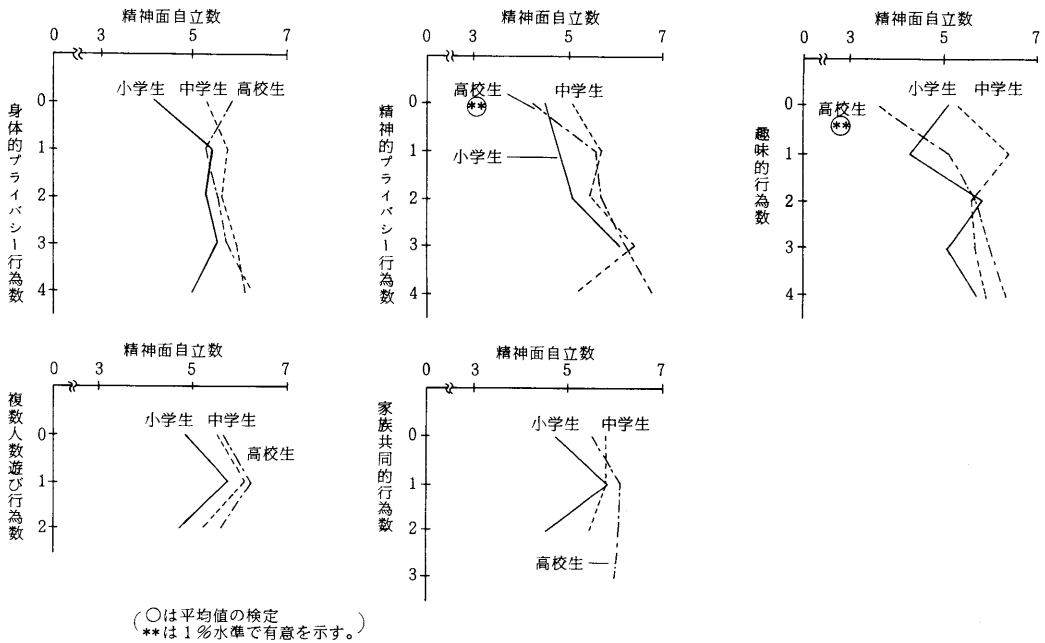


図9 子ども部屋で行う行為別平均精神面自立数 (年齢段階別)

子ども部屋の所有形態別の平均精神面自立数を図7に、子ども部屋の性格パターン別の平均精神面自立数を図8に、子ども部屋で行なう行為数別平均精神面自立数を図9に示す。精神面自立については、生活面自立に比べると子ども部屋が与える影響は大きくないが、高校生段階では精神的プライバシー行為や趣味的行為を子ども部屋で行なう行為数が増加すると自立度が進む傾向がみられる(表2参照)。しかし、いずれも子ども部屋所有の有無よりも子ども部屋の使用度による影響の方が大きい。

次に、自立の各側面と子ども部屋との関連を表3に示す。生活面自立では子ども部屋の所有が自

立を促す側面は、中学生と高校生において住生活面および就寝に関わる部分にみられる。子ども部屋の性格パターンからみると小・中・高校生ともに生活面自立の各側面に関連があり、子ども部屋の使用が多目的になれば生活面自立を大きく進めることが認められる。精神面自立では、子ども部屋の占有度(子ども部屋の所有形態)が大きいほど高校生において親離れやアイデンティティ確立への志向が強くなる傾向がみられる。子ども部屋の性格パターンからみると、子ども部屋の使用が多目的化すると小・中学生では非依存性や脱自己中心性が進み、高校生ではアイデンティティ確立への志向が強くなる傾向がある。

表3 各自立項目と子ども部屋との関連

(順位相関関係)

		子ども部屋の所有形態			子ども部屋の性格パターン				
		小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生		
生活面	衣生活	自分の服のアイロンかけやズボンプレス	0.016	-0.035	-0.030	0.117*	0.205**	0.100*	
		自分の服のボタンつけやほころび直し	0.003	0.027	-0.026	-0.024	0.277**	0.124**	
		着ていく服を決める	0.070	0.074*	0.030	0.037	0.037	0.055*	
		ふとんをしく	0.077	0.088*	0.055*	0.192**	0.176**	0.157**	
		ふとんを干す	0.037	0.160**	0.133**	0.166**	0.158**	0.083*	
		自分の下着を洗濯する	-0.002	0.004	0.000	0.008	0.082*	0.069*	
	自立	食生活	自分の食器の後片付け	-0.043	0.009	-0.072*	-0.020	0.112*	0.017
			簡単な料理をつくる	0.160**	-0.003	0.001	-0.014	0.098*	0.043
		住生活	自分の部屋、勉強机のある場所の掃除	0.035	0.179**	0.113**	0.126	0.075	0.070*
			自分の部屋、勉強机のある場所の模様替え	-0.047	-0.016	0.082**	0.046	0.107*	0.054*
その他	知らない場所へ一人で行く	自分の部屋、勉強机のある場所の整理整頓	-0.035	0.081*	0.047*	0.054	0.118**	0.027	
		知らない場所へ一人で行く	-0.066	-0.011	-0.041	0.150*	0.103*	0.020	
	一人で留守番する	朝一人で起きる	0.011	0.027	0.029	0.014	-0.020	0.009	
		学用品の買い物	-0.011	-0.042	0.002	0.132*	0.009	0.021	
親に頼まれたものの買い物	親に頼まれたものの買い物	-0.015	0.052	0.042*	-0.018	0.150**	0.071*		
	親に頼まれたものの買い物	0.060	-0.061	0.021	0.080	0.030	0.029		
精神面	計画性	遊びの途中で時間が来ればやめる	-0.038	-0.030	-0.029	0.044	0.048	0.092*	
		テレビは見たいものを決めたら見ない	0.012	0.003	-0.088**	0.155*	0.060	0.041	
		自分でも計画をたてて勉強する	0.052	0.106*	0.055	0.139*	0.075	0.132*	
	非依存性	わからないことは本などを使って自分で調べる	0.007	0.027	-0.015	0.059	0.068	0.100*	
		自分のことは自分で決める	0.034	0.013	0.019	0.210**	0.103*	0.073	
	脱自己性	人のせいにならずに自分の失敗を反省する	0.001	0.098*	-0.006	0.129*	0.100*	0.041	
		自分の意見と違っても親の意見を理解できる	0.094	-0.019	-0.033	0.135*	0.027	-0.022	
	自立	親離れ	親の意見より友達の方が気になる	0.009	0.039	0.092**	0.011	0.054	0.012
			家族という時より友達という時の方が楽しい	-0.014	0.048	0.091**	0.066	0.022	-0.043
		確立志向	将来の進路についてよく考える	0.018	0.039	0.018	0.049	0.054	0.082*
早く大人になって自分でお金をかせいでみたい			-0.021	0.048	0.062*	0.113	-0.004	0.079*	
早く独立して自分ひとりで生活したい	0.020	0.065	0.074*	0.081	0.071	0.098*			

\*\*は順位相関係数1%水準で有意を示す  
\*は順位相関係数5%水準で有意を示す

#### 4. 子ども部屋を与えたことによる生活の変化

子どもの自立や子どもの生活、および親子のプライバシーや親子のコミュニケーションが、子ども部屋を与えることによってどのような変化があったかについて、母親が行なった評価からこれを検討する。

図10にあげた項目は、前項の自立項目に親子のプライバシーと親子のコミュニケーションに関する項目を加えたものである。母親が「子ども部屋を与えた結果そうだった」と考えているのは、子どものどの年齢段階でも生活面自立のうちの住生活面や就寝に関する自立の部分で多く、次いで子どものプライバシーや親のプライバシー確保が続いている。また、精神面自立のうち「自分で計画をたてて勉強する」や「わからないことは自分で

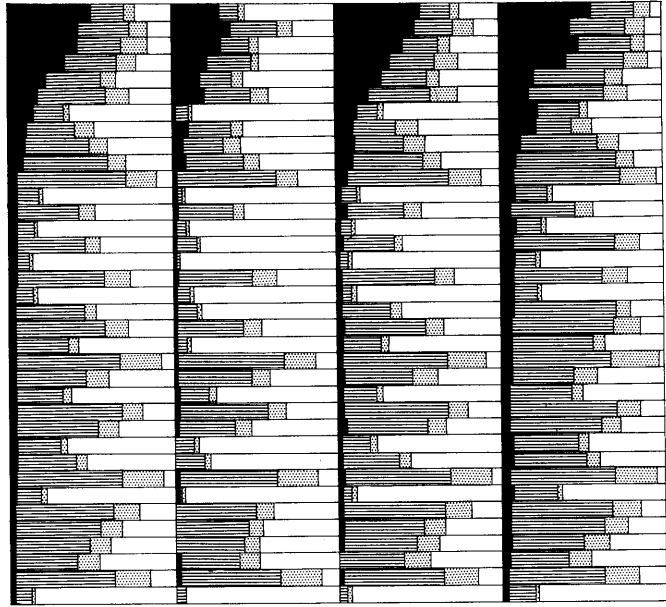
調べる」等の学習に関する計画性や非依存性の達成がさらに続いている。しかし、親子のコミュニケーションを阻害する「子どもが秘密を持つ」「子どもが自分勝手な生活をする」「子どもの行動や生活の様子がつかみにくい」「家族とのふれあいが少ない」等の変化をあげるものの比率はいずれも10%に満たない(図10参照)。すなわち、子ども部屋を与えることによって、生活上のプラス面である子どもの自立や親子のプライバシー確保の側面に対する影響は大きく、その裏側にある親子のコミュニケーション阻害の影響は少ないといえる。また、精神面自立の側面に対する影響をとらえるものの比率は多くないが、「子ども部屋と関係なくそうだった」としているものは多く、これは間接的に子ども部屋が影響している部分がないとはいえないであろう。

次に、子ども部屋を与えた後の子ども部屋の利

中島 喜代子

- ・自分の部屋のほうがえをする
- ・机の上や身のまわりの整理整頓をする
- ・自分の部屋のそうじをする
- ・自分でふとんをしく
- ・子どものプライバシーが守られている
- ・親のプライバシーが守られている
- ・自分で自分のふとんを干す
- ・朝、親に起こされなくてもひとりて起きる
- ・勉強しろと言われなくても、自分で計画をたてて勉強する
- ・わからないことは本などを使って自分で調べる
- ・遊びに行く時の服を自分で決める
- ・子どもが秘密をもつ
- ・テレビの番組は見たいものを選び、だらだら見ない
- ・子どもの行動や生活の様子がつまみにくい
- ・自分の衣服の買い物をする
- ・子どもが自分勝手な生活をする
- ・両親がいる時よりも友達といる時のほうを楽しむ
- ・家族とのふれあいが少ない
- ・将来の道路について考える
- ・自分のことは最終的に自分で決める
- ・自分の服のアイロンかけ、スボンプレス、襪おしを自分でする
- ・自分の学用品の買い物をする
- ・遊びの途中でも決められた時間がきたらやめられる
- ・知らない場所へひとりで行く
- ・自分の意見とは異なるが親の意見も理解できる
- ・親の意見より友達の見解のほうを気にする
- ・早くおとなになって自分でお金をかせぎたい
- ・自分の服のボタンつけやほころび直しを自分でする
- ・ひとりで留守番をする
- ・早く独立して自分ひとりで生活したい
- ・簡単な料理をつくる
- ・人のせいしないで自分の失敗を反省できる
- ・自分の靴を洗う
- ・自分の食器のあとかたづけをする
- ・親に頼まれた買い物をひとりでする
- ・自分で自分の下着の洗たくをする

全体 小学生 中学生 高校生



子ども部屋を与えた結果そうなった
  子ども部屋と関係なくそうなった

子ども部屋を与える前からそうであった
  まだそうになっていない

図10 母親からみた子ども部屋の影響度

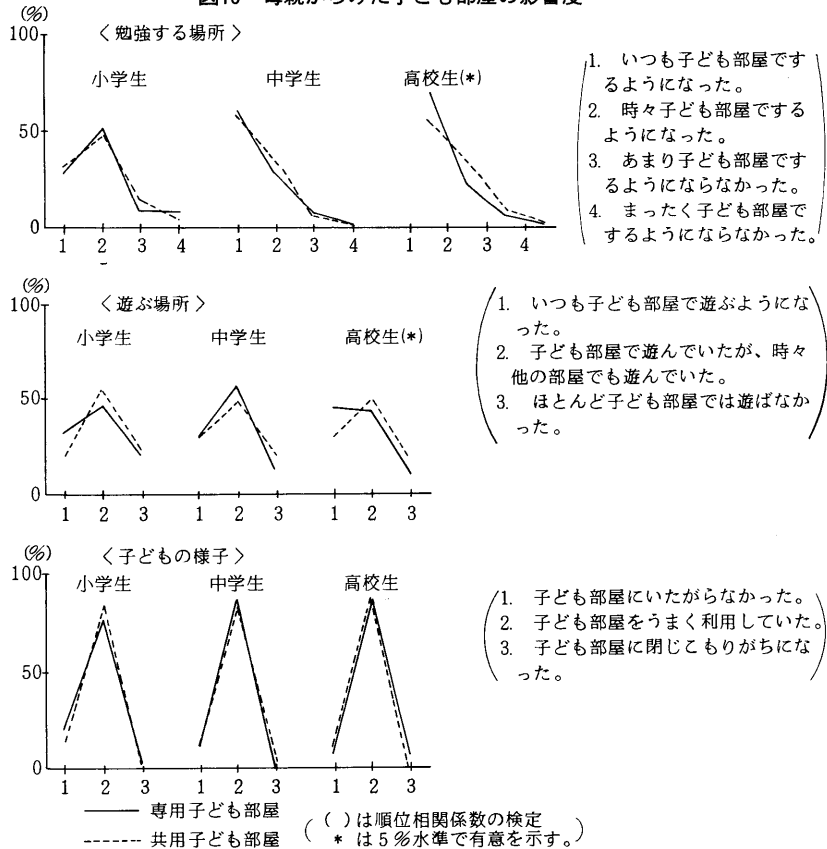


図11 子ども部屋の利用状況に対する母親の評価



## 子ども部屋に関する研究（その2）

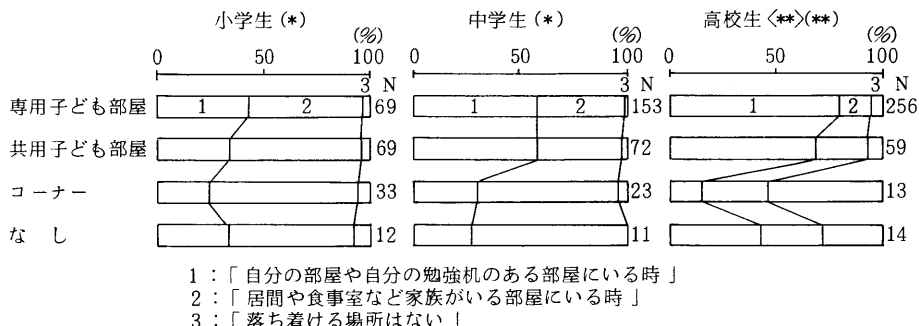


図12 子ども部屋の所有形態別にみた子どもの落ち着ける場所

用状況に対する母親の評価を図11に示す。全体では、勉強する場所は「いつも子ども部屋ですようになった」ものが58%、「時々子ども部屋ですようになった」ものが32%であり、90%のものが子ども部屋を与えることによって子ども部屋で勉強するようになっている。また、友人を連れて来た時「いつも子ども部屋で遊ぶようになった」ものが35%、「子ども部屋で遊んでいたが、時々他の部屋でも遊んでいた」ものが50%あり、85%のものが子ども部屋を与えることによって子ども部屋で遊ぶようになっている。こうした状況のもとで、子ども部屋を与えることによって子どもが「子ども部屋をうまく利用していた」と評価している母親が84%に達しており、子ども部屋を有効に利用しなかったものや、逆に「子ども部屋に閉じこもりがちになった」ものは非常に少なくなっている。年齢段階別にみると、勉強する場所は年齢が上昇するに従って「いつも子ども部屋ですようになった」ものが多くなっている。また、専用子ども部屋と共用子ども部屋による違いは高校生のみ現われており、専用子ども部屋の方が子ども部屋使用が多くなっている（図11参照）。

最後に、子ども部屋の所有状況によって子どもが落ち着ける場所がどのように関連をもっているかについて、「自分の部屋や自分の勉強机のある部屋にいる時」「居間や食事室など家族がいる部屋にいる時」「落ち着ける場所はない」のカテゴリーに分け、これを検討する（図12に示す）。年齢段階が高くなるほど、全体的に家族共用室よりも自分の空間の方が落ち着ける場所と変わっている。また、子ども部屋の所有状況別にみると、中・高校生では子ども部屋がある場合に自分の空間が落ち着ける場所となる。さらに、小・中学生では、落ち着ける場所はないと考える子どもはほとんどみられないが、高校生では、子ども部屋をもたな

い場合には住居内に落ち着ける場所を見出せなくなる傾向がとらえられる。また、中・高校生にとっては、子ども部屋の代替空間としての「コーナー」は、落ち着ける場所としては「コーナーもない」場合と同様の傾向でほとんど意味のない場所となっているようであり、子ども部屋の必要性が指摘できる（図12参照）。

## 5、おわりに

現在わが国では、子ども部屋の所有率は性別に関係なく非常に高いものであり、空間の事情が許すかぎり積極的に子ども部屋を与えている状況であるといえる。

このように、子ども部屋をもつことが一般的な状態のなかで、子ども部屋をもつことが、子どもの生活面における自立度を進める機能を果たしており、また子ども部屋をより積極的に多目的に使用している場合には、さらに子どもの生活面自立を進めるだけでなく、精神面における自立を進める効果をも果たしている。

一方、子ども部屋を与えることによる影響を母親の評価の側面からみると、子どもの生活面自立に与える影響と親子のプライバシー確保の効果を認めており、家族のコミュニケーションを妨げるような影響をとらえる割合は低い。また母親は、与えた子ども部屋を子どもが有効に利用していると考えている。

さらに、中学生になると家族室よりも自分の空間の方が落ち着ける場所となり、高校生になると子ども部屋をもたないことによって、住まいの中に自分の落ち着ける場所をなくしてしまっている。

以上のように、現在概括して子ども部屋は子どもや家族にとって好影響を与えるものであるといえる。これらの状況を踏まえると、子ども部屋不要論にたつよりは、子どもも親も子ども部屋を持

中 島 喜代子

つことに積極的であることを、より良い住空間を生み出す原動力としてとらえる方が建設的であり、貧弱な住環境の中でもなお住要求の発現が弱いわが国において、住環境改善に向かわせる有効な効果をもたらす役割を期待できよう。

最後に、本研究に協力していただいた石黒真弓・遠藤三佐子の両氏ならびに調査に協力していただいた皆様に感謝します。

注

- 1) 中島喜代子：子ども部屋に関する研究（その  
1）子ども部屋の空間条件に与える要因、三重  
大学教育学部紀要、第44巻、1993年